

【はじめに】

現在、お薬手帳というツールを持ちながら、我々はそれを有効利用できているのか。

果たして、**お薬手帳は一体誰の為に必要なのか？**

その問いに立ち返った時、改めて、お薬手帳は患者様自身の為にある、という結論に行きつく。

では、どうすればそれが患者様に伝わり、理解されるのだろうか。ここから我々の取り組みは始まった。

【目的】

お薬手帳は、薬とともに暮らす人々の日常と、大切な命を守るために必要である。このことを患者様自身にご理解いただき、実際に有用性を実感した上で、積極的に活用してもらう事を目的とする。

【方法】

薬剤師は患者様からの質問や相談を受け、それに対する答え、また、対話の中で気付いたこと、医師への連絡が必要と思われること等をお薬手帳に記載する。

その結果得られるメリットが、患者様のお薬手帳に対する意識を変え、その必要性の理解へと繋がっていくのかを検証する。

<患者様への指導内容を記載した例①>

年月日	処方内容	病院・薬局名
様		
医師	医療機関名	大学医学部附属病院
肝胆膵・移植外科		
処方日 平成24年 7月12日	調剤日 平成24年 7月12日	
[1] エンターール配合内用剤		80 g
1日1回朝食後		7日分
はあと薬局	電話 0598-25-1811	
低血糖について…低血糖の主な症状としては、脱力感、強い空腹感、冷や汗、動悸、手のふるえがあり、50mg/dl以下では、意識レベルの低下、めまいが出現し昏睡状態になることがあります。低血糖の症状が出たら、ブドウ糖あるいはそれに代わる糖分の多い食品を摂るようにしてください。		

低血糖について質問があり、口頭で説明した上で、注意点や対応をお薬手帳に記載した。

この記載内容を日常的に確認することで、気をつける症状やその対策が理解でき、大変役立ったと言われた。

<患者様への指導内容を記載した例②>

●くすりは正しく使いましょう。●

様

医師 [] 医療機関名 [] 内科クリニック
内科
処方日 平成24年 6月11日 調剤日 平成24年 6月11日

[1] [] 内科
リビトール錠 5mg 1錠
○服用中はグレープフルーツやグレープフルーツジュースを食べたり、飲んだりしないようにして下さい。
1日1回夕食後 28日分

[2] [] 内科
重質カマダG「ヒシヤマ」 1.5g
1日3回毎食後 28日分

[3] [] 内科
ロコイドクリーム0.1% 10g
1日1回 患部に塗布
かゆみのあるところ

はあと薬局鎌田店 電話 0598-50-3250

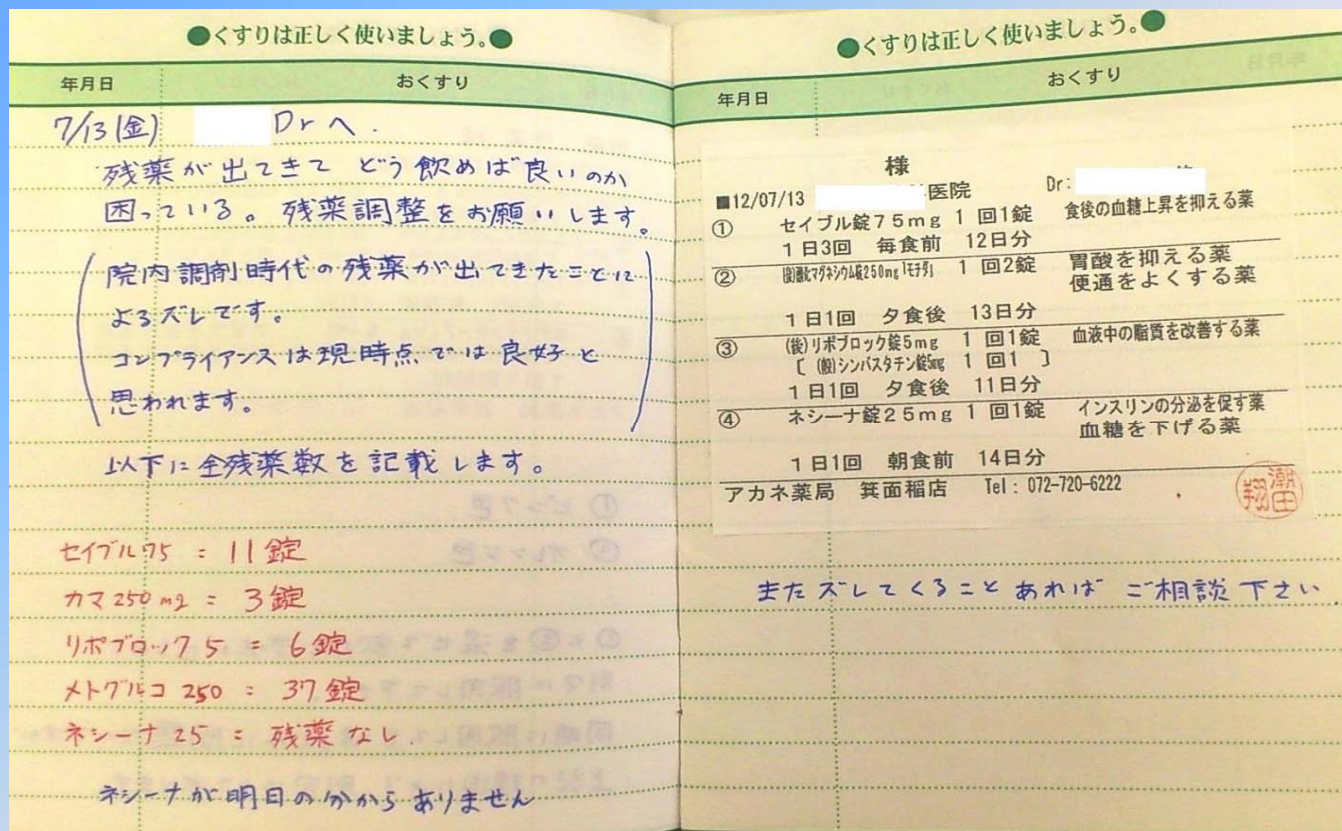
<柿を食べ過ぎると便秘になる理由>
・柿はビタミン豊富で食物繊維も多く含まれているので柿を食べて下痢を招くが、食べ過ぎると柿に含まれているタンニンという成分が腸粘膜に作用して膜を張り、腸への刺激を減らしてしまうため、便秘になることがある。

32

「柿を食べ過ぎると便秘になるのはなぜですか」との質問に対して、回答を記載した。

文字で書いてあると、後で他の人にも教えてあげられる、と喜んで頂けた。

< 医師への情報提供を記載した例 >



患者様から、残薬はたくさんあるが、1種類だけ先になくなり混乱している、との相談を受けた。

残薬数と、医師へのメッセージを手帳に記載。その後、手帳を持って受診していただく。

結果、右ページ記載の通り、日数調整された処方内容となった。

手帳を忘れがちな患者様だったが、その後は毎回持参されている。

<その他の症例①>

相談内容

漢方の食前服用のタイミングがわからない。



手帳記載内容

食前は食事の20～30分前です。
白湯に溶かしても服用できます。



結果

漢方薬はあまり馴染みがないが、これからはここに書いてある事を見れば服用法に迷う事なく飲める、と喜んで頂けた。

<その他の症例②>

相談内容

患者宅へ配達に伺った際、1カ月分の残薬を発見。



手帳記載内容

定期薬、臨時薬ともに1カ月分残薬がありますので、次回診察時には投薬は必要ありません。



結果

医師は記載内容を鑑み、次回診察時の処方しなかった。残薬調整のきっかけとなった。

<その他の症例③>

相談内容

鎮咳去痰薬を服用するようになってから尿が出にくくなったようだ。



手帳記載内容

この薬を飲むようになってから、尿が出にくくなった。



結果

次回受診時、薬はそれまでのものから漢方薬に変更、副作用とみられる症状は改善された。さらに一連の経過を記載することで、他科受診の際に備えることができた。

【考察】

今回、患者様のお薬手帳へのより深い理解と、その有効利用を目的とし、実際に患者様の声を聞きながら、「薬剤師によるお薬手帳への+ α 記載」という方法を用いて検証してきた。症例の中には、患者様自身の口からは医師に伝わらなかった残薬の実態や、副作用の情報、また、診察室や、投薬を受けた当日は思いつかなかったこと等、日常を過ごす中で見つかる質問もあった。

また、これら相談に対し、手帳へは薬剤師による手書き記載としたが、これはオリジナリティーをより感じていただくのに役立ったのではないだろうか。自分の為だけの情報であるという認識は、手帳に対する愛着に通じるものでもある。

数はまだ少ないが、今回の症例から、手帳への記載という手法がお薬と暮らす上で実際に役に立ち、お薬手帳を持つことは有意義であるという実感を、患者様自身に持っていただけたのではないかと考える。

【まとめ】

お薬手帳が、原則全ての薬局利用者に発行されることになって半年が過ぎようとしている。手帳の普及は進んでいるが、その一方、有効に活用されていない事例も多いのではないだろうか。より多くの患者様に積極的に活用していただくため、我々薬剤師の側からも、もう一歩進んだ形での利用法を提案していきたい。

今回、相談のなかった患者様にも、例えば、数値のみを手書き記載できるような独自のスタンプや、「骨量、増えてきました！」「血圧コントロール順調です！」など患者様にエールを贈るメッセージ性のあるスタンプ等、ツールを用いるという方法もある。手帳活用の可能性には、まだまだ広がりを感じる。

「お薬手帳は誰の為に必要ですか？」

「私の為に必要です」

患者様からそう答えていただく為に、今後も継続した提案を行っていく。

